

「女性による、女性についての、女性のための」推理小説？

——Frauenkrimi とは何か——

横 山 香*

Crime Fiction “Written by, about and for Women”? :

What is *Frauenkrimi*

Kaori YOKOYAMA

要 旨

Frauenkrimi は、「女性による、女性についての、女性のための」推理小説と言われ、1990年代前後に女性作家の推理小説がドイツ語圏で流行した際にこの用語が定着したとされるが、その概念の定義は簡単ではない。ドイツのヴィースバーデン市が2000年から5年にわたり女性の作家に与えた賞「女性推理作家賞」(“FrauenKrimiPreis”)は、Frauenkrimi の概念とその褒賞の是非について、激しい議論を引き起こすことになった。この議論を整理すると、とくに女性作家が推理小説ジャンルにおける制度的なジェンダーの不均衡を感じているということ、Frauenkrimi が相反する傾向——フェミニズム的か、女性向けの通俗的なものか——で捉えられていることが明らかになった。本稿では Ingrid Noll と Charlotte Link という、現代のドイツを代表する Frauenkrimi の作家の作品を取り上げ、テキストそのものの傾向ではなく、その読まれ方と、そこで生み出される文化的意味が重要であることを指摘した。

【キーワード】 女性作家の推理小説、ドイツの大衆文学、文学制度とジェンダー、イングリット・ノル、シャルロッテ・リンク

I. はじめに

Frauenkrimi とは、女性名詞 Frau 「女性」の複数形の Frauen と、男性名詞 Krimi (Kriminalroman/Kriminalliteratur の省略形) 「推理小説」の複合語である。Frauen-を付けることによって合成される名詞にはさまざまなものがあるが、文学の領域では Frauenliteratur (Frauen + Literatur) や Frauenroman (Frauen + Roman) ということがしばしば用いられる。Frauenliteratur を日本語に訳すと、「女流文学」ということになろうか。しかしこれらの単語の Frauen-には、書き手が女性であるということだけではなく、物語の主人公や重要な登場人物が女性である、女性の問題 (Frauenthemen/women's issues) を扱っている、おもな読者が女性であるというような意味も含まれている。それゆえ、「女性による、女性についての、女性のための」(“von Frauen, über Frauen,

平成 29 年 9 月 6 日受理 *教養部 准教授

für Frauen”)というフレーズがしばしば用いられるのである。

推理小説のジャンルでは1980年代から90年代にかけて、とりわけ英語圏の女性推理作家たちが書く、女性を主人公とした作品が流行する。英語圏では *women's crime fiction/novel* と呼ばれ、それらはドイツ語圏市場にも波及し、また多くの女性推理作家を生み出すことになった。その際にこういった作品群を分類するため、おもに出版社によって用いられたことばが *Frauenkrimi* であった。しかしこのことばをめぐる、その後議論が引き起こされることになる。そしてそれはまさに *Frauen*-という、この複合語の前半を構成する概念と関わる文化的な問題でもあった。

本稿では、まず *Frauenkrimi* の成立史を概観し、次にその議論のきっかけとなった、女性推理作家に与えられた賞“*FrauenKrimiPreis*”をめぐる議論から、*Frauenkrimi* の問題性を明らかにする。そして現在のドイツを代表する2人の女性推理作家の作品から、*Frauenkrimi* の可能性を示唆したい。

II. *Frauenkrimi* の概念の成立史

Frauenkrimi ということばが定着したのは、1990年代前後の、女性推理作家による推理小説が流行した頃であった。このブームをドイツ語圏で牽引したのは、Argument 出版から1988年に刊行された“*Ariadne-Frauenkrimi*”シリーズ、女性関連の書物を扱う *Orlanda* 出版の“*Orlanda-Frauenkrimi*”シリーズ、あるいは Fischer や Knauer、Rowohlt といった大手出版社の *Frauenkrimi* と銘打たれたシリーズであった¹⁾。しかしもちろんこれ以前に、女性推理作家は存在した。

推理小説成立の前提が近代司法制度の確立にあるとすれば、それはおよそ19世紀半ばであるというのが通説である。作家の Dieter Paul Rudolph は、19世紀後半、ドイツ語圏においてもかなりの数の女性の推理作家がいたと推測している。しかし推理小説の「評判の悪さ」ゆえ、彼女たちの多くが男性のペンネームで書かざるを得ず、今となってはほとんど資料も残っていない²⁾。また Rudolph によれば、1909年に最初の女性私立探偵 *Violet Strange* を創出した Anna Katharine Green (1846-1935) の作品は、ドイツ語圏でも人気を博し、ベストセラーになった³⁾。

Agatha Christie (1890-1976)、Patricia Highsmith (1921-1995)、Dorothy L. Sayers (1893-1957) といった女性推理作家たちが活躍したのは1920年代から50年代であるが、彼女たちが活躍した時代は、女性推理作家の「黄金時代」と呼ばれる⁴⁾。Christie の最初の独訳 *Mord auf dem Golfplatz* (原題 *The Murder on the Links*, 1923) は1927年に出版され、彼女の作品は50年代になって次々とドイツ語に翻訳された。

その後、推理小説のジャンル内で作風の大きな変化が訪れる。それがハードボイルドである。その嚆矢とされる Dashiell Hammett (1894-1961) はすでに1929年に処女作を出しており、その後 Raymond Chandler (1888-1959) らさまざまな作家によって、ハードボイルドは推理小説のサブジャンルとして確立されていくことになる。黄金時代の女性作家たちが生み出した主人公たち(ひいては女性作家たち自身)は、謎を解決できる理性は男性のものだけはないという事実を示した。しかしタフで非情な主人公、感傷を排したリアリズム、暴力や性の描写など、ハードボイルドにおいては、再び推理小説の男性性が強調されることになった。

もっともこのような作風に、女性作家たちが影響を受けないわけではなかった。1972年にはイギリスの作家 P. D. James (1920-2014) が *An Unsuitable Job for a Woman* (邦題『女には向かない職業』) で女探偵 Cordelia Gray を生み出した。その10年後のアメリカでは、Sara Paretsky (1947-) が V. I. Warshawski (通称「ヴィク」) という、そして Sue Grafton (1940-) は Kinsey Millhone (通称「キンジー」) という、拳銃片手に巨悪に立ち向かう二人のハードボイルドな女探偵を誕生させた。この二人の女性探偵が同時に登場した1982年というのは、大矢博子によれば「女性ミステリ史においてエポックメイキングな年」⁵⁾であった。その後、数多くの女性の探偵・警察官・検視官・科学捜査官などが女性作家の手によって生み出され、この時代は「新黄金時代」と呼ばれる⁶⁾。もちろんこれはアメリカやイギリスだけの現象ではなかった。ドイツでは、ヴィクとキンジーの最初の作品はそれぞれ1986年と1987年に翻訳出版されており、こういった女性作家たちの作品群に、ドイツ語圏の女性作家たちによる推理小説も加えられ、Frauenkrimi を冠したシリーズが刊行されるようになった。

この「新黄金時代」の流れを生み出したのは、推理小説という文芸ジャンル内における様式の変化に留まらない。その大きな要因の一つとして、フェミニズムが挙げられる。

ヴィクとキンジーという二大スター誕生の背景には、70年代のアメリカで盛んだったフェミニズム運動があったことは自明だ。女性だって自分の人生を自分で選んでいいんだと、夫や父親といった男性に従属する必要はないのだと、今となっては当然の価値観を得るために当時の女性たちが声を上げた、そのひとつの象徴がヴィクでありキンジーだった。私立探偵という“女には向かない職業”を、彼女たちは天職のように我が物にしている。⁷⁾

実際、Paretsky 自身、フェミニズムには深く関与していた。1971年、Chandler の *The Big Sleep* (邦題『大いなる眠り』) を読んだとき、彼女はその女性の描写に激しい怒りを覚え、それゆえフィクションや社会のなかに存在する女性に対する支配的なイメージを転覆させる小説を書くことを誓ったという⁸⁾。

しかしながら、ジェンダー問題に限らずに言えば、社会の現実に向き合い、それに対する告発や批判をする推理小説というのは、この時代よりもすでに先行して存在していた。ハードボイルドもそうであるし、ドイツにおいては Soziokrimi (社会派推理小説) と呼ばれる推理小説のジャンルが存在した。アメリカのドイツ文化研究者 Faye Stewart によれば、

とくに西ドイツでは、犯罪を、異常な人間が犯す、社会規範からの偶発的な逸脱としてではなく、むしろ、制度化された構造的不正——その根は帝国主義、植民地主義、あるいはファシズムとその遺産にある——によって生じる、根本的な社会問題として描く文化的傾向が、1960年代および70年代に存在した。⁹⁾

第二次世界大戦後、西ドイツは奇跡の経済復興を果たすが、それと同時にさまざまな社会問題も生じた。1960年代後半の若者たちの反乱はこういった時代へのリアクションでもあった。社

会派推理小説において重要であったのは、こういった社会批判的な視点と、そして現実にコミットするためのリアリズムの手法であった。

この時代のドイツの女性推理作家としては、Irene Rodrian (1937-) が挙げられる。彼女は1967年に女性作家で初めて推理作家賞を取り、その後も成功を収めた作家である。もっとも、その際彼女は男性名で応募しており、女性が書いたと知った出版社側が賞金の5000マルクを1500マルクに減額したという事件が起こっている¹⁰⁾。少し時代を下れば、Pieke Biermann (1950-)¹¹⁾や Anne Chaplet (1951-)¹²⁾らが骨太の作品を書き始めている。

西ドイツの社会批判的な文化風土とフェミニズムの影響をもっとも強く受けたのが、Argument 出版の Ariadne と名付けられた Frauenkrimi のシリーズである。Argument 出版というのは、ハンブルクに拠点を置く左翼系の出版社である。そこから「女性」を冠した「推理小説」のシリーズを出版した1988年当時、編集者の Else Laudan (1963-) には逆風しか吹いていなかった。この時代であっても、ドイツではまだ推理小説は「ゴミ」扱いで、決して「文学」として扱われることはなかった。しかも推理小説というジャンルのなかでは、「女性」ということで二流扱いされた。左翼の同志からも大衆迎合の金儲け主義と批判された。それでも彼女は、Antonio Gramsci の大衆に到達する通俗文化の力という概念を信じ、推理小説というジャンルを選択する¹³⁾。その結果、このシリーズは大成功を収めた。そして Ariadne シリーズは、出版界のなかで Frauenkrimi というジャンルの牽引者となっていくのである。

しかし Frauenkrimi のブーム自体は、1990年代半ばに一旦終焉する。Laudan はその原因としていくつか挙げているが、女性解放運動が収束し、「女性の」書店・カフェ・集会等 Frauen-を冠した場所や概念がなくなってしまったことを一因にしている。しかし同時に、女性がメインストリームになっていったことも理由として挙げている。つまり、もはやわざわざ Frauen-と冠することをしなくても、テレビには女性刑事や女性警察官が当たり前のように登場し、書店の本棚には女性作家の推理小説が多数並ぶようになったのである。だがこのブームが去った10年後に創設された、わざわざ Frauen-と冠して女性推理作家に贈られた賞が、このジャンルにジェンダーをめぐる問題がまだ孕んでいることを曝すことになった。

Ⅲ. “FrauenKrimiPreis” をめぐる議論

1. 賞の概要

“FrauenKrimiPreis” (以下 FKP 賞) はドイツ・ヘッセン州の州都であるヴィースバーデン市が、女性作家によってドイツ語で書かれた推理小説¹⁴⁾に与えた賞であり、2000年から2005年まで6度授与された。Ingrid Noll (詳細は以下のIV. (1)を参照) や Doris Gercke (1937-)¹⁵⁾など、ドイツ語圏を代表する女性作家らによる選考委員 (Mordsschwestern¹⁶⁾と称された) が候補者をノミネートし、5名の女性審査委員により選ばれた。審査委員には当時のヴィースバーデン市の文化部長で、FKP 賞創設に中心的役割を果たした同盟90/緑の党会派の Rita Thies も含まれていた。副賞として賞金が与えられ、2000年には1万マルク、2004年は5500ユーロが授与されている。

受賞者には、日本でも翻訳があるドイツの作家 Petra Hammesfahr (1951-) ¹⁷⁾ や、オーストリアの作家 Irmtraut Karlsson (1944-)、スイスの作家 Verena Wyss (1945-) などがいた。最終年の受賞者は、FKP 賞の選考委員を務めたこともある Sabine Deitmer (1947-) であった。

この賞をめぐるのは、以下に示す Tobias Gohlis (1950-) の問題提起をはじめ、さまざまな批判や議論があったが、結局 6 年で終わったのは、実際のところ政治的な駆け引きによるものであった。Thies が取っていた女性関連の政策は、基本的にフェミニズム路線であった。しかし連立を組んでいたキリスト教民主同盟 (CDU) は、こういった女性政策に多額の予算を投じることには積極的ではなかったし、会派内でもかなりの批判や反発があった。そして結局、同市の文化関連予算の緊縮を理由に FKP 賞は廃止されるに至ったのである ¹⁸⁾。

2. 賞をめぐる議論

FKP 賞をめぐる議論の発端は、Gohlis が 2002 年に、作家、評論家、編集者、書店経営者、研究者らに向けて、自身のメーリングリスト上で「何のための FKP 賞か？」を問うたアンケートであった。Gohlis は推理小説の文芸評論家として大手新聞で書評欄を担当し、また、毎月優れた推理小説を 10 冊選出する *KrimiBestenliste* ¹⁹⁾ という書評プロジェクトを主催するなどして、ドイツの推理小説ジャンルの発展に貢献してきた人物である。現在では彼のこのメーリングリストは閲覧できないが、かなり論争的な場となっていたという ²⁰⁾。Gohlis は、そのうちの 16 人の回答をまとめたものを、*Die Zeit* (2002 年 49 号) / *Die Zeit Online* (2002 年 11 月 28 日) に寄稿した ²¹⁾。

Gohlis のアンケートは、1. *Frauenkrimi* をどのように理解しているか、2. *Frauenkrimi* というカテゴリーは誰にとって、どのような視点から意味があるか、3. FKP 賞の授与は意味があると思うか、4. FKP 賞を受賞したいか、また受賞のための条件は何か、5. その他の意見、という 5 つの質問で構成されていた。

ここでは 1. および 2. から *Frauenkrimi* の定義を、3. および 4. の FKP 賞の是非を詳しく見ていき、FKP 賞をめぐる議論から *Frauenkrimi* を考えてみる ²²⁾。

(1) *Frauenkrimi* の定義

すでに述べたように、このことば自体は 1990 年頃に定着した。しかしその概念の定義は、「一見シンプルに聞こえるが、決して見かけほどは単純なものではない」²³⁾。もっとも広義な概念としては、*Frauenkrimi* とは女性作家によって書かれた推理小説、というものである。そのうえで、主要登場人物が女性である、さらに女性の問題を扱うというような条件を付け加える回答者もいる。

しかし *Frauenkrimi* の定義を難しくしているのは、それぞれの回答者による作品の傾向の捉え方である。これは大きく、(A) フェミニズム的傾向持つものとしての捉え方、(B) 「女性の読み物」としての捉え方、とに分けることができる。

(A) のフェミニズム的傾向持つものとしての捉え方は、上述の *Frauenkrimi* の歴史と関わっている。アンケートの回答でこのような捉え方をしているのは、たとえば作家の Lisa Kuppler

(1963-)である。彼女は *Frauenkrimi* が文学的なカテゴリーではなく、社会学的・政治的・歴史のカテゴリーだとしたうえで、1970年代から80年代初頭にかけての *Frauenkrimi* の政治的な意味は、「フェミニズム的で女性解放的」な内容を持っていたところにあったとする²⁴⁾。ただし Kuppler は、このような傾向さえあれば、作家は必ずしも女性である必要はないとしている。推理小説専門のプロガー Ludger Menke にとっても、*Frauenkrimi* に「フェミニズム的・女性解放的」傾向があることが重要であり、「とくに男性の頭のなかでは相変わらず支配的な、男女の役割に関する伝統的なイメージをひっくり返す推理小説」のことを指す。彼においては女性が中心的な役割を果たす、あるいは女性作家が書いている、というだけでは *Frauenkrimi* ではない。推理小説専門書店経営者の Robert Schekulin は *Frauenkrimi* を次のように定義する。(1) 女性によって書かれている、(2) 主人公が女性である(警官、探偵、主婦等々)、(3) 女性のために書かれており、フェミニズムの傾向を持っている、(4) 現代の作品である(したがって Christie は *Frauenkrimi* に分類しない)、(5) 同一作家でも *Frauenkrimi* として分類すべき作品とそうではない作品がある。とりわけ彼は(3)に関して強く主張しており、*Frauenkrimi* というのは、たとえ物語の周縁においてでも、われわれの父権的な社会における女性の日常、女性に対する差別、あるいは女性であることから生じる葛藤をテーマ化し、主人公や他の女性の登場人物の解放への試みを扱っていなければならないとする。一方、Chaplet は、捜査に関わる人物が皆女性で、殺人が抑圧からの解放を目的とする行為であるものが *Frauenkrimi* であるとしている。ただし彼女自身はそもそも *Frauenkrimi* を読まないし、読む気もないと述べている。

回答のなかには、主人公がレズビアンであるとするものがあつた。フェミニズム的傾向が見られるかどうかは作家や作品にもよろうが、しかしジェンダーの問題に敏感であるという点では、クィアの作家や主人公の作品も、この(A)にカテゴライズしてもよいだろう。たとえばドイツ語にも翻訳がある Sandra Scoppettone (1936-)、Katherine V. Forrest (1939-)、Val McDermid (1955-)らは自身もレズビアンを公言していたり、主人公や主要登場人物がレズビアンやゲイであつたりする。

一方(B)「女性の読み物」として捉えている回答者もいる。「女性の読み物」とは、古くは19世紀の女性雑誌に掲載されていたような感傷的な小説や、「ハーレクインロマンス」といったシンデレラストoryを原則とする恋愛小説、あるいは近年流行している、都会的な女性の日常生活を描く Chick lit など、女性向けの通俗的な娯楽小説を指し、ドイツ語では *Frauenroman* と呼ばれることもある。

アンケートでこのような回答をしているのは、推理作家で、ボーフム・ミステリ・アーカイブ(Bochumer Krimi Archiv)およびこの組織によるドイツ・ミステリ大賞(“Deutscher Krimi Preis”:以下DKP賞)創設者の一人である Reinhard Jahn (1955-)で、馬小屋が馬のための小屋であるのと同様に、*Frauenkrimi* というのは、女性が女性の部屋で読むための推理小説である、とする。マーロウ賞(“Marlowe-Preis”:1992年から2002年まで存在したドイツのレイモンド・チャンドラー協会によって授与された推理小説賞)、フリードリヒ・グラウザー賞(“Friedrich-Glauser-Preis”:ドイツ語圏の推理作家協会 Syndikat が毎年授与している推理小説賞。以下グラウザー賞)の受賞者である推理作家 Horst Eckert (1959-)の意見は次のようなものである。すな

わち、Christie や Highsmith にはもちろん決して〔傍点強調筆者〕Frauenkrimi という概念は使わない（成功すればそのようなレッテル貼りは不要である）。他の女性作家も、自分の作品が Frauenkrimi というレッテルを貼られていい気はしないだろう。なぜならそうされることで読者層——実際 Frauenkrimi を求める女性購買者たちはいくらでもいる——が決まってしまうからである、と述べる。1996年にDKP賞を受賞したRegula Venske（1955-）ははっきりとFrauenkrimiを馬鹿にしていると言う。1991年、1994年、1998年と3度にわたりDKP賞を受賞しているBiermannは、Frauenkrimiとは真剣に読んでもらうつもりなどないと容赦を乞う女性を書くものだと、馬鹿で、（思考することに）怠慢で、関心の低い書店員、文芸評論家、出版社関係者のものだと酷評する。

もっともJahnとEckertの真意は、女性推理作家の差別にはない。Jahnの場合は、あらゆるものをジェンダーによって隔離しようとする男性的で排他的な体制に対する批判であり、Eckertは、アメリカやイギリスと比較して、ドイツではまだ女性が推理小説を書くという文化が成熟していないことを指摘しているのである。

しかし、Frauenkrimiの読者の文学的・審美的判断に対する不信感もしくは軽蔑が、作家らの意識に刷り込まれていることは否定できない。1970年に根強くあった「《女性文学》を文学的に一ランク低いものとして、すなわち女性読者の受けをねらったセンチメンタルな通俗文学に近いものとして理解する文学制度側の先入観」²⁵⁾〔傍点強調筆者〕は今なお存在し、それは推理小説のジャンルでも同じなのである。こういった作家たちとは反対に、書店経営者の立場から回答するSchekulinは、Frauenkrimiということばが差別的、軽蔑的に使われることなど経験したことがなく、女性作家たちがそう分類されることで過小評価されるという不安がどこから来ているのか分からないと述べているが、その不安をもたらしているものは、むしろ作家や評論家たちが自ら作り出している集合的な（女性）読者像であり、Schekulinが接する現実の購買者ではないのである。

このようにFrauenkrimiの定義をめぐる議論を見ると、二つの、いわば相反するとも言える概念で捉えられていることが分かる。これはFrauen-を冠する事象全般に共通する問題でもある。そしてその境界線が——フェミニズム的であるか、反フェミニズム的であるか、はたまた非フェミニズム的であるか——といったように引かれるとき、それらは女性の文化の内部を分断するものとして作用することになるのである。

(2) FKP賞の是非

「文学の質に男性も女性もない」というテーゼを推理小説に当てはめると、「推理小説の質に男性も女性もない」となるだろう。そこには文学／推理小説に対する普遍的な価値基準の存在が前提とされており、文芸批評というのは、まさにその正当性・妥当性の生産・再生産の活動とすることもできる。そのような規範をもってすれば、「女性のみにも与えられる」賞というのは、女性の囲い込みと男性の排除によって、一方では男性に対する不公平（「男の賞などないのに」）あるいは「逆」差別を、他方では女性に対する過小評価（「女性限定などという賞をもらっても、正当な評価をされたことにならない」）を生み出すものとなる。

Gohlis のメーリングリスト上では、この問題についてかなりの議論になっていたという²⁶⁾。それは、「男性の賞」や「男性の推理小説」への感情的な言及への反論が、公表された回答にあることから窺い知ることができる。もちろんこういった意見は男性だけが言っているのではない。女性作家の Biermann や Venske は FKP 賞について否定的である。しかし Gohlis がまとめた回答では、FKP 賞の肯定派が多数派を占めている。Frauenkrimi そのものには否定的な Chaplet や Deitmer といった作家すら FKP 賞については容認しているのである。

彼女らの意見に共通に見られるのが、推理小説というジャンルとその褒賞制度における男性優位の現状を女性作家らが感じ取っていることである。マーロウ賞を受賞している作家 Birgit H. Hölscher (1958-) は、実際の女性推理作家の数に比して、書評や出版物での扱いが少な過ぎることを指摘している。Chaplet は、推理小説が男性の領域ということはよく耳にするし、自身の DKP 賞受賞の際、女性だから1位になれなかったという話を聞いたという経験から、DKP 賞が「男性の賞」であるのだから、FKP 賞があってもいい、という意見である。Kuppler も、グラウザー賞からマーロウ賞まで、男性名が付けられていることから分かるように、ドイツの推理作家賞は長らく純粋に男性の賞だったと述べる。DKP 賞とグラウザー賞を受賞している作家 Uta-Maria Heim (1963-) はドイツに限らず世界的な傾向として、質の高い女性推理作家が数多くいるにもかかわらず、結局推理作家賞は男性の手に渡るものだ、とそのジェンダーの不均衡を指摘している。

こういった批判に対し、受賞者の性別による不均衡は、「選考の際の性別の差ではなく、作品の質/作家の才能の差である」という反論はつきものである。しかしここで彼女たちが自分たちの実感や経験から指摘しているのは、その「質」や「才能」を評価する基準そのものが、歴史的に男性優位の文学の、あるいは推理小説というジャンルの制度のなかで作られてきたということである。そしてそこでは、「女性」の対義語が「男性」ではなく「人間」となる、その非対称性が問題なのである。DKP 賞やグラウザー栄誉賞を受けている Deitmer でさえ、Gohlis のアンケートの回答のなかで、このことを痛烈に皮肉っている。

女性作家に対する賞、いいんじゃない？多くの文学賞は若い男たちのホームゲームなんだから。男たちから男たちへ。彼らはかなり巧妙だから、性別について話さないだけ。年老いていく男たちが性交能力の問題やアイデンティティの危機を書けば、「男の文学」とされることなく、世界それ自体についての根本的な言明という厳粛さを用いていることになる。すなわち「大文字の文学」(“LITERATUR”)というカテゴリー。²⁷⁾

文学作品への褒賞制度がどれほど客観性・中立性であるのかという議論にはここでは立ち入らないが、FKP 賞の是非をめぐる議論では、文学あるいは推理小説というジャンルにおける歴史的に制度化されたジェンダーの不均衡さということが一番の問題であったと言える。

3. 賞をめぐる議論から見えてくること

Gohlis や Ariadne シリーズの編集者 Laudan をはじめ、DKP 賞を主催するポーフム・ミステ

リ・アーカイブやグラウザー賞を主催する協会シンジケート (Syndikat) など、推理小説ジャンルに関わる作家、評論家、編集者、出版社らが、ドイツ語で書かれた推理小説の質とジャンルの文学的・文化的地位の向上を目指しているのは事実である。なぜなら、そもそも推理小説というジャンルが「文学」であるのかというと、少なくとも、日本的な用語で言えば純文学 (ernste Literatur) の側からすれば即座に「否」となるからである。とりわけドイツの現代文学においては、「文学」とは「言語そのもの」に集中すべきものであり、叙述的要素 (das Erzählerische) は排除されるべきであるとされる²⁸⁾。ましてやある作品に娯楽的要素があれば、それは決して「文学」にはなり得ない²⁹⁾。

このようにまだ純文学と娯楽文学との二分化が文芸批評において明確であり、それゆえ前者が伝統的に権威を持つところで、推理小説というジャンルの文学的・文化的存在価値をどのように考えればよいのだろうか。その答えの一つは、北欧ミステリに見られるような、社会批判的機能を持った推理小説の成功にあった。

1990年代の終わり頃、スウェーデンの作家 Henning Mankell (1948-2015) や Stieg Larsson (1954-2005) らの北欧ミステリがドイツ語圏でもブームとなる。彼らの成功が示したのは、推理小説が娯乐的であっても社会批判として機能し得る、あるいは、シリアスな社会批判的内容であっても、読者を楽しませ得るという認識であった³⁰⁾。1970年代に存在した社会派推理小説はその先駆けではあったが、ポピュラリティにおいては周縁的であった。しかし今では、推理小説を「ゴミ」扱いしていた文学的エリートすら推理小説を手取るようになり、推理小説は堂々と「人前で読める本」³¹⁾となったのである。Die Zeit というような高級紙において推理小説の書評欄ができたのは、このパラダイムシフトの象徴的な結果の一つと言えるだろう。このように推理小説の文化的上昇や制度化に尽力する者たちにとっては、ジェンダーを分断し、さらには女性を分断するような概念を包摂する Frauenkrimi をことさらに取り上げる FKP 賞は、たしかに鬼子以外の何者でもなかったであろう。

IV. Frauenkrimi の例——Noll と Link

次に Frauenkrimi の例として、ドイツの代表的な女性推理作家が書いた小説を紹介する。両者ともすでに多くの作品を世に出しており、一作品だけでは不十分であるが、彼女たちの作風は示すことができると考える。

- (1) Ingrid Noll: *Der Hahn ist tot*. Zürich: Diogenes, 1991. (邦訳『特技は殺人』平野椰子訳、集英社文庫、2000年³²⁾)

Noll は 1935 年上海で生まれた。大学ではドイツ文学と美術史を専攻したが、中退している。結婚して主婦となり、家事や介護の傍ら、1991年にこの小説でデビューした。当時すでに 55 歳であったが、現在でも執筆活動を続けている。ドイツを代表する推理作家であり、1994年グラウザー賞、2005年グラウザー栄誉賞を受賞している。また FKP 賞選考委員も務めた。

この小説の原題は、直訳すれば『雄鶏が死んだ』となり、これはドイツでよく歌われている童

謡の一節である。主人公は、「私」ことローゼマリー・ヒルテ、52歳、独身の保険会社員である。大学時代に付き合っていた男性は、突然別の女性と結婚した。それからというもの、上司と不倫をしたり、パカンスでその場限りの男性とつきあったりしたが、結婚に至ることはなかった。職場では聞こえよがしに噂話の種にされているが、同僚とは一線を画し、付き合わないことにしている。友人は幼馴染のベアーテだけだ。彼女は浮気をした夫と別れ、年頃の難しい子どもたちを抱えているが、いつも明るく前向きで、最近では既婚者の彼氏もいる。

ある日、彼女はヴィートルトという高校教員に一目惚れをする。彼女は同僚の女性に世話を頼まれた犬を連れて、夜な夜な彼の家をこっそりと覗きに行く。そしてそこで、彼がアルコール中毒の妻を銃で撃つのを目撃する。ローゼマリーは家に入り、妻を撃ち殺し、ヴィートルトも撃つて正当防衛を装い、彼を救う。こうして何とか彼に近づくことができ、デートまでして彼女は有頂天になる。しかし彼には好きな女ができたようだ。友人のベアーテではないか。そう疑って、彼女はベアーテをピクニックに連れ出し、塔から突き落とす。しかしそれは事実ではなく、彼が付き合っていたのは、ベアーテの娘のヴィヴィアンだった。しかしその関係は年の差で、すぐにうまくいかなくなっていた。ベアーテの事件を捜査する警察には、ベアーテがヴィートルトを好きだったが、娘と付き合っていることを悩んでいると打ち明けられたとローゼマリーは嘘をつく。

ヴィートルトはヴィヴィアンと休暇旅行を計画するが、彼女のわがままで頓挫する。ローゼマリーは代わりに行きたいと申し出る。彼は了承するが、友人のエルンストとその妻パメラ、通称「スカーレット」と、ヴィートルトを崇拜する同僚の女性、通称「キティ」を誘っていた。5人で行った旅先のアルザスで、ヴィートルトとスカーレットが関係を持っていることを知り、彼との夜の逢瀬から帰ってきて浴槽に浸かっていたスカーレットを、電源を入れたヘアカーラーを浴槽に入れて殺害する。

帰国後、ローゼマリーに警察から疑いがかけられる。ヴィートルトの周りですでに3人の女性が死んでいる。そしてそこにはローゼマリーも絡んでいる。疑いを持った刑事が彼女の部屋を訪れたとき、ヴィートルトの事件で使った銃を見つけられそうになった彼女は、その銃で刑事を撃ち殺す。

彼女はヴィートルトを呼び、2人で始末をしようと持ち掛ける。最初は拒んでいたヴィートルトであったが、石切場で刑事の死体を載せた車を落とすことを決める。しかし、ヴィートルトが操作を失敗し、彼が載ったまま車は穴に落ちる。彼は奇跡的に助かったが、全身不随となってしまふ。その目からは、彼の考えを読み取ることもできない。ローゼマリーは週に二度彼を見舞い、車いすを引いて彼と散歩をするのだった。

Nollの小説に感じられるのは、徹底した、冷徹なまでのリアリズムと、決してあり得そうもないという意味での非リアリズムの奇妙な混ざり合いである。ローゼマリーは合計4人も殺害している。その犯行は、一度は刑事に追い詰められそうにはなったものの、結局ばれることはない。さらに、推理小説／ミステリではあるが、「誰が／どうやって／なぜやったか？」という謎解きの要素がまったくない。主人公が殺人者であるので、「誰が」は除いても、殺人の方法もそ

の場しのぎであり、彼女自身が次々に人を殺す動機について何も語らない。たしかに最初はヴィートルトへの愛情だったかもしれない。だがその愛情も、彼女はたびたび疑っている。スカーレットを殺したあと、ローゼマリーはこれまでの殺人に思いをめぐらせる。

時間が刻々と過ぎていくあいだ、私は自分がそもそもまだヴィートルトをほしいのかじっくり考えてみた。私は彼のためにたくさんのことを犠牲にしてきた。私の自由、社会的評判、そしてこれまでのすべての生活習慣を危険にさらしてきた。もし彼が突然——そんなことありそうもないけれど——、私を愛してくれて、私と寝食をとともにして、お金や休暇や友人を分かち合おうとしてくれるとしたら？でもそれって本当に目指す価値があるものなのかしら？私にはすべてが疑わしく思えてきた。彼は私にとって、徹底的に、永久に、他人なのだ。絶望が襲ってきた。私はどうして3人の女性を殺してしまったのだろうか？1人目は多かれ少なかれ過失だから、私が責めを負うことはそんなにないだらう。ベアーテを殺したのはひどかった。まったく余計なことだった。思い返したくもない。でも今日やったことは——あの魔女を溺死させたことは——ちょっと満足。だって、他の2人とは違って、あの女は私を完膚なきまでに侮辱したのだから。(S. 199)

ローゼマリーに決して人としての感情がないわけではないが、人を殺すことに関しては一切の道徳的感情が欠落している。それどころか殺人によって万能感さえ得ている。作家によるその非現実的な描写に対し、人の、とくにネガティブな感情の描写は非常にリアルである。それが殺人という非リアルに、何の逡巡もなく繋がるのである。

ベアーテの葬式の後、彼女の不倫相手にローゼマリーが飲食店に連れて行かれ、警察に嘘をついたことを責められるシーンがある。

「おまえら行かず後家ってのはどんな世界に住んでるんだ？」彼が大声で言ったので、周りの客が一斉に振り向き、私を興味深そうにじろじろ見た。(…)

「あんたのような年齢で、ダンナも子どももないとなれば、きっと他人の恋愛生活に妄想を抱いてしまうだろうな。これ以上、あんたに関係のない話に首を突っ込むな。」(…)

私は頷いた。彼はやっと私の腕から手を離した。カウンターで支払いを済ませ、立ち去った。もちろん後になって、彼にこう言えた、ああ言えた、いろんなことが思い浮かんだ。行かず後家の妄想などと彼が言い始めたとき、反撃してやればよかった。あなたとヴィートルトは格が違うって、ベアーテは私に言っていましたよ、って。

あんな2本の指で人を掴める大男を、銃がなければどうやったら殺せるだろう？毒殺？どうやって毒を調達する？そして彼にどうやって毒を飲ませる？(…)寛大な心で、私は彼を生かしておくことにした。(S. 132-133)

Noll はフェミニズム的な *Frauenkrimi* の代表格として挙げられることが多い。たとえば Gohlis のアンケートでは *Chaplet* が「邪魔者は殺せ、それが男ならなおさら」というモットーにしたが

っているものを *Frauenkrimi* として、Noll の名前を挙げている。また Noll の小説が女性の主人公の「解放の物語」として読めると評されることもある³³⁾。

(2) Charlotte Link: *Der fremde Gast*. München: Goldmann Verlag, 2005.

Link は 1963 年、フランクフルト・アム・マインに生まれた。16 歳からすでに小説を書き、大学では法学を学ぶが、小説家の道を選び国家試験を断念した。これまで 30 作品以上を発表しており、出せば売れるというベストセラー作家である。いくつかの作品は邦訳も出版されている³⁴⁾。

この小説『見知らぬ客』は、ミュンヘン郊外の高級住宅地に住むレノウスキー夫妻が殺害されることから話が始まる。この夫妻の隣宅に住むカーレンは、エリート銀行員の夫と 2 人の子どもを持つ結婚 11 年目の専業主婦である。ここ数日隣宅の夫妻の様子がおかしいと思い警察に通報しようとするのだが、問題を起こしたくない夫は取り合わない。

一方、南フランスの別荘地では、レベッカという女性がまさに自殺しようとしていた。彼女は虐待児童の支援施設を設立し精力的に活動する女性だったが、夫の死後生きる気力を失ってしまっていた。そこに友人のマキシミアンが、ヒッチハイクをしていた大学生の夫婦インガとマリウスを連れてくる。

夫妻が殺害された頃、レベッカのかつての知人たち、すなわち児童福祉局やレベッカの虐待児童支援施設で働いていた女性たちに脅迫状が届いていた。脅迫状の主を探すなか、彼女たちはマリウスに突き当たる。彼は子どもの頃、アルコール中毒の両親から引き離され、里子に出されていた。その先がカーレンの隣人のレノウスキー夫妻だった。里親で弁護士をしていたレノウスキーの目的は子どもの虐待であり、マリウスはその犠牲者であった。しかしその事実を、レノウスキーは自らの地位とコネクションを利用し、巧妙に隠蔽してきた。警察は、老夫妻殺害事件にマリウスが関わっているとして動き出す。そのことを何も知らないレベッカとインガは、レベッカの別荘でマリウスに拘束されてしまう。

しかしこれらの犯行はすべてマキシミアンがマリウスを利用して仕組んだものだった。彼は親友の妻であったレベッカを密かに愛しており、彼女が夫の死後生きる意欲を失っていたことで、彼の愛情をレベッカへの憎しみに変えたのであった。インガが何とか脱出し、最終的にレベッカは救われる。そして彼女たちは自分たちなりに人生を再建しようとする。

この小説は、カーレンの物語としても読むことができるのではないと思う。自分の道を切り開いて生きてきたレベッカとは異なり（しかし彼女も夫の死によって生に絶望するという弱さを見せているのだが）、カーレンは典型的な中産階級家庭の妻・母として描かれる。良き妻、良き母となるために、彼女はつねに感情を押し殺し、受け身な態度でいようとしている。しかしその結果、夫と子どもに愛されるどころか逆に軽く見られ、夫の浮気現場を見ても彼に高圧的な態度で言い込められ、言い返すことばも持たず、我慢し、悩み、泣くだけである。

「お前や子どもたちを庭付きの高級な家で悠々と暮らしていけるように、俺がどれだけ大変な目をして金を稼いでいるのか、お前は分かっているのか？」(S. 150)

彼には太刀打ちできない。彼女はそう思って、溢れ出てくる涙を必死でこらえた。頭の良さも、機転も、自立心も、彼に釣り合わないのだ。影の薄い、見栄えのしない女。自分と結婚したことをきっと彼は深く後悔している。(S. 181)

そんなカーレンを決定的に変える出来事が起こる。様子がおかしかったレノウスキー宅に植木屋が来て、一緒に中に入って確かめようと言ってきたのだ。夫の許しなしにそのような冒険をする性格ではないカーレンであったが、意を決して隣家に入り、老夫婦の死体を発見する。警察から、殺害された妻の方は、2日ほど生き延びていたことを聞く。彼女がもっと早く行動を起こしていたら、助かっていたかもしれないのだ。しかしこの彼女の行動が、案の定夫のさらなる怒りを買うことになる。

「不安げなまなざしで顔色をうかがって、しっぽを振ってついてくる小さな女の子を妻にしたいなんて俺は思っていないんだ。俺が求めているのは大人の女性なんだ。俺を怒らせる危険を冒してでも自分の道を行く女性をね。」

カーレンは啞然として彼を見た。

「私がどうやったらそんな女性になれるっていうの？あなたは私に軽蔑しか示さないっていうのに？」

「逆だよ」とヴォルフは言った。「逆に見なきゃいけない。もし君がそういう女性だったら、君に軽蔑を示す理由なんて俺にあるか？」(S. 259)

物語のなかに、自分の態度が他者との関係性を変化させることにカーレンが気づく場面がいくつか出てくる。その例がレノウスキーと逆側の隣人との関係である。カーレンはこの口うるさい老女がとても苦手だった。カーレンの犬があまりにも吠えるので（これはレノウスキー宅の様子がおかしいことに犬が気づいていたからである）、文句を言われてしまう。その老女はレノウスキー家で飼われていた犬は吠えなかったと言った。

「あの人たち、こう言っていたわよ。犬ってものは完全に従属させて、自分が家族の一番下位にあるってことを分からせないといけないってね。分かります？」(…)

何かがカーレンのなかで動いた。悲しみと諦めの厚い層の下にある深いところで。それは怒りかもしれない。カーレンは自分に怒りという感情がまだ完全に消えずに残っていることに驚いた。もう長らく、彼女は怒るということなどなかったのだ。(…)

「いずれにせよ、うちの犬には思い通りにさせないなんてことは、まったくありませんから」、彼女はそう冷たく言った。驚いたことに、彼女がきつく言ったことで、老婦人の態度が突然変わった。態度を和らげたのだ。(S. 63)

物語の最後、彼女は休暇旅行に行く夫と子どもを空港に送り届け、一人になった家で弁護士に離婚の相談の電話を掛ける。

Link 作品の特徴は、誰の日常生活にも起こり得る出来事に対する、とくに女性の登場人物たちの細やかな心理描写にある。登場人物の環境や置かれている状況が異なっても、読者／オーディエンスがメディアのテキストのなかで生じる出来事を象徴的な表象とみなして「リアル」だと捉えることを、文化研究者の Ien Ang は「感情のリアリズム」(“emotional realism”)と呼んだ³⁵⁾。Link のポピュラリティの要因の一つは、ここにあると筆者は考えている³⁶⁾。そしてまさにこの感情=感傷を引き起こすテキストゆえに、彼女の作品は「通俗小説」とされ、高級紙の文芸欄で酷評される。たしかに、Link の小説は一応「フーダニット」(「誰がやったのか?」)の形式を取っているのだが、推理を目的に読むと、逆にこの細やかな心理描写がストーリー進行の妨げになっていると感じることも多い。いわばプロットの、それは「余分」なのである。それでもなお 500 ページを超える長編小説の一气読みができるのは、彼女の作品がこの「感情のリアリズム」を引き起こすものであるからだろう。

Noll はフェミニズム的、Link は「女性の読み物」で通俗的として、上述の相反する Frauenkrimi の傾向に分類することができるだろう。しかしそれはテキストの傾向であり、テキストが読者によってどのように読まれているか、ということではない。ポピュラー文化研究においては、テキストを読解する際に、どのような文化的意味や快樂が読者／オーディエンスによって生み出されるかということ、すなわちテキストと読者／オーディエンスとの《交渉》が問題にされてきた。そのような観点からすれば、Frauenkrimi のテキストに描かれる、ジェンダー化された社会のなかで女性が直面するさまざまな問題や出来事に、読者がいかに共感し、慰められ、あるいはそれによって意識が変わったり、そこから力を得たりするかが重要なのである。Frauenkrimi はたんなる作家のジェンダー問題ではない。それは現実がジェンダー化された世界である限り続く、読者にとっての文化的問題でもあるのである。

おわりに

Frauenkrimi の定義のところで、読者の文学的・審美的判断に対する作家や評論家らの不信感について言及したが、FKP 賞をめぐる議論に無意識に表れていたのは、推理小説という大衆娯楽文学のジャンルにおいてさえ、そのジャンルの文化的価値を引き上げようとするなかで、作家たちが読者よりも評論家の方を向かざるを得ないような形で制度化されている(もちろんそこには、評論家が評価するものにこそ価値があるとするような読者の存在もあるのだが)という現状ではないだろうか。近年ドイツにおいて非常に人気が高く、また多くの国でも翻訳されている Nele Neuhaus (1967-) のデビューについて、彼女の作品を邦訳する酒寄進一は、「新人賞を獲った、とか書評家が褒めた、とかではなくストレートに読者の人気で火がついた。そこが今までの作家と大きく違うところだと思います。一般の読者のハートを掴んだのが大きい」³⁷⁾と述べている。実際、現在までのところ彼女に与えられた賞が、日本とドイツの「本屋大賞」³⁸⁾のみというのは非常に象徴的である。インターネットの普及によって「一般の読者」がますます声を上げることができるようになっていくなか、推理小説ジャンルの、とりわけ「体制側」にいる作家や評論家の意識は今後変わっていくのだろうか。

注

- 1) Brigitte Frizzoni: *Verhandlungen mit Mordsfrauen. Geschlechterpositionierungen im «Frauenkrimi»*. Zürich: Chronos, 2009, S. 48 および Faye Stewart: *Der Frauenkrimi. Women's Crime Writing in Germany*. In: Katharin Hall (ed.) *Crime Fiction in German. Der Krimi*. Cardiff: University of Wales Press, 2016, pp. 100-114, here p. 106.
- 2) Dieter Paul Rudolph: *Frauen und Krimis – eine überflüssige Kolumne*. <http://www.krimi-couch.de/krimis/dprs-krimilabor-frauen-und-krimis-eine-ueberfluessige-kolumne.html> [最終閲覧日: 2017年9月4日]。ここで名前が挙げられている男性名で書いていた女性作家は、Franz von Busch (Jenny Hirsch, 1829-1902), Herbert Ribulet (Gabriele von Schlippenbach, 1896-1937), Erich Ebenstein (Annie Hruschka, 1867-1929) など。
- 3) Ibid.
- 4) Julie H. Kim: Introduction. *Re-imaging Gender and Sexuality in Women's Crime Fiction*. In: Julie H. Kim (ed.): *Murdering Miss Marple. Essays on Gender and Sexuality in the New Golden Age Women's Crime Fiction*. North Carolina: McFarland, 2012, pp. 1-12, here pp. 1-2.
- 5) 大矢博子「女性私立探偵の系譜」『ミステリーズ!』Vol.69、東京創元社、2015年、4-10ページ、6ページ。
- 6) Kim, op. cit., p. 2. 文化研究者の Cora Kaplan は「新黄金時代」と「黄金時代」の違いとして、「黄金時代」の女性作家たちは、「最悪の場合ははっきりと反フェミニスト的であったし、伝統的なジェンダー関係が崩壊することに対しきわめて両義的態度であった」と指摘している。Cora Kaplan: *An Unsuitable Genre for a Feminist?* In: Bob Ashley (ed.) *The Study of Popular Fiction. A Source Book*. New York: Continuum International Publishing, 1989, pp. 199-203.
- 7) 大矢、前掲、6-7ページ。日本では、ヴィク・シリーズは1985年に、キンジー・シリーズは1987年に邦訳出版が始まっている。
- 8) Sara Paretsky: 'I start each VI Warshawski book convinced I can't do it.' The bestselling crime writer on hating femmes fatales, self doubt and creating a female character who refused to be silenced. (2015年8月7日) <https://www.theguardian.com/books/2015/aug/07/sara-paretsky-interview-i-start-each-vi-warshawski-book-convinced-i-cant-do-it> [最終閲覧日: 2017年8月29日]
- 9) Stewart, op. cit., p. 103.
- 10) http://www.irenerodrian.de/rez_int_buecher4um.php [最終閲覧日: 2017年9月4日]
- 11) 邦訳に「まなざしの法則」(原題: *The Law of the Eye*, 池田香代子訳、ジェローム・チャーリン編『ニュー・ミステリー・ジャンルを越えた世界の作家42人』小林宏明他訳、早川書房、1990年、164-172ページ)、「7.62」(原題 7.62, 菅沼裕乃訳、サラ・パレットキー編『ウーマンズ・ケース 下』山本やよい他訳、ハヤカワ・ミステリ文庫、1996年、71-96ページ)がある。
- 12) 本名の Cora Stephan 名で政治・戦争関連の執筆活動をする一方で、1998年に Anne Chaplet 名で出版した *Caruso singt nicht mehr* (邦訳『カルソーという悲劇』平井吉夫訳、創元社、2007年)を發表し小説家としてデビューした。
- 13) Else Laudan: *Der Krimi ist politisch*. http://www.krimis-machen.eu/wp-content/uploads/2013/09/13-08-26-Laudan_Krimi-ist-politisch_Vortrag.pdf. [最終閲覧日: 2017年8月24日]
- 14) FKP 賞の構想時点では、「女性がドイツ語で書いた、自己意識の高い女性探偵や女性刑事が殺人事件を捜査する物語や小説」に授与する、というより具体的なものであった。Ohne Verfasser: *Mords-Wettstreit in Wiesbaden. Erster bundesweiter Frauenkrimipreis ins Leben gerufen*. In: *Frankfurter Rundschau* (2000年10月14日)
- 15) 女性刑事 Bella Block シリーズは、公共放送局第二ドイツテレビ ZDF でテレビドラマシリーズ化されていた。

- 16) 直訳すると「殺人姉妹」となる。
- 17) 邦訳『記憶を埋める女』（原題 *Die Sünderin*, 畔上司訳、学習研究社、2002年）がある。
- 18) Streit um Frauenkrimipreis. *Frankfurter Allgemeine Zeitung* (2004年4月9日) <http://www.faz.net/aktuell/rhein-main/region/wiesbaden-streit-um-frauenkrimipreis-1163603.html> [最終閲覧日: 2017年8月24日]
- 19) プロジェクト開始の2005年から2010年までは KrimiWelt-Bestenliste という名で日刊紙 *Die Welt* およびラジオ局 Nordwestradio、テレビ局 ARTE Deutschland 等との共催であった。2011年から2016年までは KrimiZeit-Bestenliste という名で週刊新聞紙 *Die Zeit* およびラジオ局 Nordwestradio の共催、現在は KrimiBestenliste という名で、日刊紙の日曜版 *Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung* とラジオ局 Deutschlandfunk Kultur との共催で継続されている。ドイツ、オーストリア、スイスの文芸評論家やジャーナリスト10名によって、毎月10冊の推薦書リストが提示される。 <http://www.kriminetz.de/news/krimi-bestenliste-wird-10> および http://www.boersenblatt.net/artikel-krimibestenliste_wechselt_partner.1270217.html 参照。[最終閲覧日: 2017年8月15日]
- 20) Frizzoni, a.a.O., S. 49-50.
- 21) <http://www.zeit.de/2002/49/frauenkrimi/komplettansicht> [最終閲覧日: 2017年8月29日]
- 22) 以下の Gohlis アンケートの回答文の引用は、すべて注21のサイトからの筆者の拙訳である。
- 23) Faye Stewart *German Feminist Queer Crime Fiction: Politics, Justice and Desire*. Jefferson, North Carolina: McFarland, 2014, p. 9.
- 24) Kuppler は Frauenkrimi が流行した1990年代以前の女性推理作家たちの作品を、Frauenkrimi ということばで指している。
- 25) 鈴木洋子「《フェミニズム文学》から《女性文学》へ——„Frauenliteratur“ をめぐる議論について——」学習院大学大学院ドイツ文学語学研究会『ドイツ文学語学研究』Vol.12、1998年、17-36ページ、引用は29ページ。この指摘自体は Evelyn Torton Beck und Patrica Russian: *Die Schriften der modernen Frauenbewegung*. In: Jost Hermand (Hrsg.): *Neues Handbuch der Literaturwissenschaft: Literatur nach 1945 II. Themen und Genres*. Wiesbaden: Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion, 1979, S. 357-386 からの引用として記されている。
- 26) Frizzoni, a.a.O., S. 49-52.
- 27) 出典は注21)に同じ。
- 28) Burkhard Spinnen: Ey, das ist doch U. Oder: Gibt es einen Mauerfall zwischen unterhaltender und ernster Literatur? In: Olaf Kutzmutz (Hrsg.): *Bestseller. Das Beispiel Charlotte Link*. Wolfenbüttel: Die Bundesakademie für kulturelle Bildung Wolfenbüttel, 2010, S. 106-125, hier S. 109-110.
- 29) Georg Reuchlein: Reine Glückssache? Bestseller aus verlegerischer Sicht. In: Olaf (Hrsg.), a.a.O., S. 77-105.
- 30) 日本では松本清張らの社会派推理小説が、すでに1950年後半には同様のことを示していた。ドイツと日本における娯楽小説の評価の違いについては、松本清張『砂の器』の映画およびテレビドラマへのアダプテーションを論じた拙稿 Kaori Yokoyama: *Literatur als populärkulturelles Phänomen: Seicho Matsumotos Suna no Utsuwa*. In: Annie Bourguignon u. a. (Hrsg.): *Zwischen Kanon und Unterhaltung*. Berlin: Frank & Timme, 2016, S. 393-408 参照。
- 31) 酒寄進一／マライ・メントライン「ドイツミステリ対談」『ミステリーズ!』Vol.51、東京創元社、2012年、5-14ページ参照。引用は10ページ。ただしこれが、どのような社会階層での現象かについては注意する必要がある。
- 32) 以下の本文の訳は、平野訳を参考にした筆者の拙訳である。
- 33) Katharina Düringer: *Beim nächsten Lesen wird alles anders*. Königstein: Ulrike Helmer Verlag, 2010, S. 122.
- 34) 邦訳に『姉妹の家(上・下)』（原題: *Das Haus der Schwestern*, 園田みどり訳、集英社文庫、2010年）『沈黙の果て(上・下)』（原題: *Am Ende des Schweigens*, 浅井晶子訳、創元推理文庫、2014年）、『失踪者(上・下)』（原題: *Die letzte Spur*, 浅井晶子訳、創元推理文庫、2017年）がある。
- 35) Ien Ang: *Watching Dallas. Soap Opera and the Melodramatic Imagination*. London, New York: Methuen,

1985, pp. 44-45.

- 36) 横山香「フィクションのなかのリアリティ——Charlotte Link の小説における女性像——」日本独文学会『日本独文学会 2014 年春季研究発表会研究発表要旨』、2014 年、30 ページ。
- 37) 酒寄／メントライン、前掲、10 ページ。
- 38) 日本の「本屋大賞」は NPO 法人本屋大賞実行委員会が運営する文学賞で、書店員が投票する。Neuhaus は 2012 年より新設された「翻訳作品部門」で、『深い疵』（原題：Tiefe Wunden, 酒寄進一訳、創元推理文庫）が 2013 年の 3 位となった。ドイツの本屋大賞 MIMI は日本とは異なり、いくつかの本屋が作品をノミネートし、読者が投票する仕組みとなっており、作品は推理小説ジャンルに限られている。Neuhaus は *Böser Wolf* (『邪悪な狼』) で 2014 年に賞を受けている。

Summary

The term *Frauenkrimi*, literally “women’s crime fiction,” is commonly described as crime novels “written by, about and for women.” It reputedly gained a foothold in the 1990’s when an abundance of crime novels written by female authors began to accumulate in bookstores in German-speaking countries. A clear definition of the term, however, is elusive. The vague conceptualization of what *Frauenkrimi* means and the controversy surrounding *FrauenKrimiPreis*, a prize bestowed on female authors by Wiesbaden City in Germany from 2000 to 2005, spurred intense debate. Drawing on comments from the authors, critics, scholars, and others involved in this debate, it is shown that female authors experienced institutionalized gender inequality in the crime fiction genre, and also that *Frauenkrimi* is caught between two contradictory tendencies, feministic or trivial and feminine. Using the novels of two representative German *Frauenkrimi* authors, Ingrid Noll and Charlotte Link, I suggest the importance of how text is interpreted and how cultural meanings are produced by readers.

[Key words] women’s crime fiction (*Frauenkrimi*), German popular literature, gender in literary institutions, Ingrid Noll, Charlotte Link